

レファレンス事例集

地域編

注：長浜市内の図書館での調査結果をもとに編集しています。「参考資料」として掲載した資料はすべて図書館に所蔵しています。事後調査により加筆修正する可能性があります。ご了承ください。

- Q1 高月町にあったという阿曾津千軒の場所・伝説について
- Q2 太平洋戦争中、湖北地方に空襲があったかについて
- Q3 海北綱親（海北友松）について
- Q4 浅井長政の母について
- Q5 五村別院と教如上人について
- Q6 淵元太郎右衛門について
- Q7 明治期の長浜-関ヶ原間または龍が鼻間の鉄道事情について
- Q8 浅井氏の居城であった小谷城について
- Q9 小室藩の改易後から明治に至る領地について
- Q10 さばそうめんについて
- Q11 土倉鉱山（木之本町金居原）について
- Q12 賤ヶ岳戦跡碑について
- Q13 深坂峠（塩津街道）の紫式部の歌碑について
- Q14 野瀬藤五郎の伝説について
- Q15 湖北地域（特に木之本町古橋周辺）の茶製造について
- Q16 藤岡和泉について
- Q17 塩津街道・海道のルートについて

Q18 長浜の引札について

Q19 大吉寺（旧浅井町野瀬）の歴史について

Q20 国友鉄砲と曳山の関わりについて

Q21 昭和56年（1981）の余呉地方の豪雪について

Q22 長浜市の劇場について

NEW	Q23 長浜の遊郭について	2025/9掲載
-----	---------------	----------

NEW	Q24 飯福寺（長浜市木之本町）について	2025/9掲載
-----	----------------------	----------

NEW	Q25 古保利古墳群について	2025/9掲載
-----	----------------	----------

NEW	Q26 玄蕃尾城について	2025/9掲載
-----	--------------	----------

NEW	Q27 琵琶湖産の真珠について	2025/9掲載
-----	-----------------	----------

NEW	Q28 富田人形について	2025/9掲載
-----	--------------	----------

NEW	Q29 長浜バイパス（国道8号線）について	2025/9掲載
-----	-----------------------	----------

NEW	Q30 北国街道沿いの宿場について	2025/9掲載
-----	-------------------	----------

NEW	Q31 木戸港（長浜市高月町）について	2025/9掲載
-----	---------------------	----------

NEW	Q32 井口弾正屋敷跡について	2025/9掲載
-----	-----------------	----------

NEW	Q33 湖北地方のオコナイについて	2025/9掲載
-----	-------------------	----------

登録番号	Q1	調査年月	2011年5月
質問	アツヤケン 高月町にあったという阿曾津千軒の場所・伝説について		
回答	『滋賀県百科事典』p.12「あそづばばあ：阿曾津婆」に、「高月町に伝わる伝説で高利貸しの老婆の話。金を借りた人が返せなくなり老婆を簀巻きにして琵琶湖に放り込んだ。...老婆の恨みで千軒あった村が津波で琵琶湖に引きずりこまれ、村人が逃げたところが七野あり七里村というと伝えている」とありますが、場所は特定できません。p.421「水没村伝説」に「琵琶湖周辺の山々では、地震などでもとあった村が水没したという伝説がある。高月町片山の阿曾津千軒にもあり...。」との記述があります。 『高月町のむかし話』p.20に「西野山を越えて、琵琶湖へ出たところに「阿曾津」という所があります...」との記述が、また『奥びわこ物語』p.34には「阿曾津をとり囲む西野山の木々も...」との記述があります。『高月町史 分冊1』p.144に地図の掲載があり、高月町西野の北西あたりが阿曾津だとわかります。そのほか『西野水道と農民』p.11に地図が掲載されており、阿曾津千軒伝説について記載があります。『昔話-研究と資料 41号』p.70に「滋賀県湖北の千軒伝承 阿曾津婆の伝説を中心として（黄地百合子著）」論文が掲載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『滋賀県百科事典』滋賀県百科事典刊行会/編 大和書房		
	■『高月町のむかし話』高月町教育委員会/編		
	■『奥びわこ物語』三田村正子/作 文芸社		
	■『高月町史 分冊1 景観・文化財編』高月町/編		
	■『西野水道と農民』成田迪夫/著 サンライズ出版		
	■『昔話-研究と資料 41号』日本昔話学会		

登録番号	Q2	調査年月	2015年4月
質問	太平洋戦争中、湖北地方に空襲はあったのか		
回答	『長浜市史 第4巻』p.258に昭和20年7月28日、長浜に空襲があったという記載があります。『湖国に模擬原爆が落ちた日』によると、滋賀県が発表している県内の空襲は19件。うち湖北地方は上記の1件のみでした。（p.17-22）ただし、被害がなかったものや機銃掃射などは含まれていません。『余呉町誌』には「町内には空襲による被害がなかった」とあります。『米原町史』には機銃掃射の記載があります。『山東町史』には「空襲による被害はなかった」と記載があります。『近江伊香郡誌（下巻）』は昭和28年発行ですが、太平洋戦争の記述はありません。『滋賀県の歴史』p.328に「滋賀県では彦根と大津が空襲を受け大きな被害がでている」旨の記載があります。年表p.327に「長浜市の鐘紡長浜工場に小型爆弾が数個投下され、死者一人を出す」と記載されています。『点字で読む滋賀で学ぶ戦争の記録（もっと知りたい滋賀で学ぶ戦争の記録）』には「軍事施設が狙われたこと」の記載があります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜市史 第4巻』長浜市史編さん委員会/編		
	■『湖国に模擬原爆が落ちた日』水谷孝信/著 サンライズ出版		
	■『余呉町誌』余呉町誌編さん委員会/編		
	■『米原町史』米原町史編さん委員会/編		
	■『滋賀県の歴史』山川出版社/編		
	■『点字で読む滋賀で学ぶ戦争の記録（もっと知りたい滋賀で学ぶ戦争の記録）』滋賀県平和記念館学習用小冊子編集委員会/編 滋賀県平和祈念館（注：墨字版・点字版のセット）		

登録番号	Q3	調査年月	2018年11月
質問	かいはり つたけ かいはり こけい 海北 綱親 … 海北友松の父…について		
回答	『戦国大名家臣辞典西国編』p.86に「善右衛門と称す。赤尾・雨森とこの海北を合わせ、浅井氏の海赤雨三将(かいはりさんしょう)とよんでいる。特に海北綱親は浅井氏の武者奉行を務めたとい所伝もあり…秀吉が綱親と直接戦ったことがあり、「海北綱親はわが軍法の師」といった話は有名」との記載があります。 『郷土の先哲』p.70～84では、子どもにもわかるように簡単に海北家の起こりから没役まで説明しています。 その他…『海北友松とその族』には「三・海北善右衛門」の項のほか「海北家由来諸記」の記載があります。『近江東浅井郡の昔話』の「海北友松」p.14ではごく簡単ですが綱親の人物像の記載があります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『戦国大名家臣辞典西国編』山本大/編 新人物往来社		
	■『郷土の先哲』浅井町教育委員会/編		
	■『海北友松とその族；海北顕英遺稿集』石田肇/編		
	■『近江東浅井郡の昔話；東浅井郡の昔話』馬場秋星/著 イメージアシバタ		

登録番号	Q4	調査年月	2010年4月
質問	浅井長政の母について（特に浅井家の家系図、婚姻事情について）		
回答	『みーな びわ湖から vol.97』の特集「浅井家をめぐる女性たち」に詳しく記載があります。高時川の左岸を管理する湖北町丁野の浅井家と右岸を管理する井口家の緊張関係を緩和する意図があったことなどが記されています。 『浅井長政と姉川合戦』p.40-41に系図があります。また同p.46-47に、「高時川右岸を灌漑する伊香郡用水を統括していた【井預かり】である井口氏と、高時川左岸を灌漑する浅井郡用水の代表者である浅井氏は、絶えず緊張関係にあった」、「両家の婚姻は、浅井氏の最大の経済基盤であった小谷城下の生産を安定させる目的があった」とあります。 『みーな びわ湖から vol.126』p.15に「高時川右岸を灌漑する堰を所有していたのは、伊香郡の実力者である井口弾正であった」、「浅井郡を地盤とする浅井氏は、井口弾正の娘[井口阿古（イノチノ）]を長政の父である久政の正室として娶ることによって井口家を重用する代わりに、上流に用水を引かせるという取引をおこなったと思われる」との記載があります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『みーな びわ湖からvol.97』長浜みーな協会 参考文献として『近江伊香郡志』、『近江源氏』田中政三著、『ふるさと井口の歴史探訪』高橋正泉著、『高月町の昔話』高月町教育委員会があげられています。		
	■『みーな びわ湖からvol.126』長浜みーな協会		
	■『浅井長政と姉川合戦』太田浩司/著 サンライズ出版		

登録番号	Q5	調査年月	2013年1月
質問	五村別院と教如上人について		
回答	『長浜御坊三百年誌 付 五村御坊』p.22「五村懸所」に教如上人と五村の関係について記載があります。その他下記資料を参考にしました。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜御坊三百年誌』中沢南水/著 永田文昌堂		
	■『教如上人』上場顕雄/著 真宗大谷派宗務所出版部		
	■『とらひめのれきし』虎姫町立図書館サービス充実支援事業実行委員会/編		
	■『五村御坊由緒記』		

登録番号	Q6	調査年月	2011年12月
質問	ｽｹﾄ 如ｹﾒﾝ 渕元太郎右衛門について		
回答	『長浜市史 第3巻』 p.352に「表43：大通寺に関する大工など一覧」として 大通寺建造に関わった屋根屋として名前のみ記載があります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜市史 第3巻』長浜市史編さん委員会/編		

登録番号	Q7	調査年月	2021年2月
質問	明治期の長浜－関ヶ原間または龍が鼻間（明治16年開通）の鉄道事情について		
回答	『長浜市史 第4巻』p.91、p.103には「旧長浜駅から関ヶ原間（明治16年～明治32）」の記載があります。『蒸気機関車200年史』p.216～には図の掲載があります。『日本の鉄道車輛史』p.31には「国産のSLは860形式で1893（明26）」とあり、明治16年に開通していたなら国産の車輛ではなかったことがわかります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜市史 第4巻』長浜市史編さん委員会/編		
	■『蒸気機関車200年史』斎藤晃/著 NTT出版		
	■『日本の鉄道車輛史』久保田博/著 グランプリ出版		
	■『写真集・長浜百年』長浜市総務部企画課/編		

登録番号	Q8	調査年月	2012年2月
質問	小谷城の築城について		
回答	小谷城は長浜市湖北町伊部の小谷山にありました。小谷城の築城は不詳な部分もありますが、1525年（大永5年）、六角定頼（ひしかたが 31）が湖北に侵攻した際に、小谷城の大嶽を攻めたことが『長享年後畿内兵乱記』に記載されています。『ふるさと読本 浅井氏三代と小谷城』、『小谷城絵図の基礎的考察-小谷城下の復元的研究2-』には「1524年（大永4年）頃、浅井亮政が小谷山の最頂部に大嶽を築城した」との記述があります。そのほか多数出版されていますが、築城に関する資料を集めました。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『滋賀県百科事典』滋賀県百科事典刊行会/編 大和書房		
	■『史跡小谷城跡 浅井氏三代の城郭と城下町』 湖北町教育委員会/編集 湖北町教育委員会		
	■『浅井三代小谷城物語』馬場秋星/著 木精舎		
	■『湖北残照 歴史篇 戦国武将と浅井三姉妹』豊島昭彦/著 サンライズ出版		
	■『戦国大名浅井氏と北近江 浅井三代から三姉妹へ』長浜市長浜城歴史博物館/編		
	■『ふるさと読本 浅井氏三代と小谷城』湖北町立小谷小学校/制作 歴史・文化ボランティア（亀花クラブ）/編		
	■『戦国大名浅井氏と小谷城』小和田哲男/編著 湖北町教育委員会		
	■『戦国大名浅井氏と小谷城』中村一郎/著 小谷城址保勝会/編		
	■『近江の山城ベスト50を歩く』中井均/編 サンライズ出版		
	■『図解近畿の城郭 II・IV』 中井均/監修 城郭談話会/編 戎光祥出版		
	■『小谷城絵図の基礎的考察-小谷城下の復元的研究2-』 北村圭弘 『滋賀県立安土城考古博物館紀要 第9号』抜刷		
	■『滋賀県中世城郭分布調査 7 伊香郡・東浅井郡の城』 滋賀県教育委員会/編 滋賀県教育委員会		
	■『史跡小谷城跡清水谷地区試掘調査報告書』湖北町教育委員会・滋賀県文化財保護協会/編集 湖北町教育委員会		
	■『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』湖北町教育委員会/編 滋賀県文化財保護協会		

登録番号	Q9	調査年月	2023年6月
質問	小室藩の領地（改易後から明治に至るまで）について		
回答	『辻宗範とその周辺 ― 辻宗範と小室藩』p.83に「天明八 ー七八八 五月六日、政方の時改易となり領地は没収され廃藩 彦根藩預かりとなる（略）寛政一 ー七八九 九月十七日、城館、家臣の住宅、木石に至る迄一切競売にされた。寛政三 ー七九一 江戸奉行勝与忠昌来り、開墾して畑とせよとの命あり…」とあります。 また『東浅井郡志 巻3』p.162-163にも「（六）巡見使の通過 七月九日、江戸より内命あり。曰く江北の収公地は、之を大津代官所に支配せしむべしと。…（八）第館の競売 寛政元年六月。大津代官所より、遍く小堀家の第館を首とし、家臣の住宅より庭園の木石に至るまで、悉く皆之を競売に付し、…」とあります。 『近世藩制藩校大事典』p.634には「…領地没収の上大久保忠顕に永預けとなり、廃藩された」とあり、改易後は廃藩となり、彦根藩もしくは大津代官所か大久保忠顕という人物が所有していたようですが、確定には至りませんでした。ただし、どの資料からも改易後一年程度で城館等は全て競売に出され、領地は全て畑となったことがわかります。 藩主であった小堀家自体は『日本史諸家系図人名辞典』p.306に「…天明8年（1788）政方の代に、伏見奉行在任中の失政により改易となった。政一の弟正春家の後裔が、文政11年（1828）小堀家の再興をゆるされ、300俵の扶持をうけて存続した」とあり、改易後のおよそ40年後に再興されたようです。 参考資料：市内図書館で所蔵しています ■『辻宗範とその周辺 ― 辻宗範と小室藩』宮田良英/著 ■『東浅井郡志 巻3』日本史料刊行会 ■『近世藩制藩校大事典』大石学/編 吉川弘文館 ■『日本史諸家系図人名辞典』小和田哲男/監修 講談社		

登録番号	Q10	調査年月	2011年7月
質問	さばそうめんについて		
回答	さばそうめんがどんな料理であるかは『長浜みーなvol.44』p.8-9が詳しく、「太い竹ぐしを刺して丸ごと焼いた」焼きサバ“とそうめんを、砂糖と醤油で味付けした濃い目の煮汁で甘辛く炊き合わせたもの。三月から五月にかけて、とくに長浜曳山まつりやゴールデンウィークの頃に、よく作られる湖北の家庭料理」と紹介されています。また、作られる時期については、春の農繁期に嫁の実家から嫁ぎ先に品物を持っていく「五月見舞い」といわれる湖北独特の習慣があげられています。 『ごめんやすおいでやす 第2集』p.43には、「かつては、若狭で陸揚げしたさばを、浜ですぐに焼いて鯖街道から湖北地方に運ばれました」といった記述とともに、簡単な味付けの仕方が記載されています。 『つくってみよう滋賀の味 新装合本』p.69と『こぐれひでこの発見! 郷土食』p.91には、調味料の分量まで明記されたレシピが掲載されています。 また、『日本の食生活全集25 聞き書 滋賀の食事』p.295と『おもしろふしぎ日本の伝統食材 7さば』p.26には、朽木地方の郷土料理としても紹介されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜みーなvol.44』長浜みーな協会		
	■『ごめんやすおいでやす 第2集』会議BIWA/編 びわ町		
	■『つくってみよう滋賀の味 新装合本』滋賀の食事文化研究会/編 サンライズ出版		
	■『こぐれひでこの発見! 郷土食』こぐれひでこ/著 日本放送出版協会		
	■『日本の食生活全集25 聞き書 滋賀の食事』農山漁村文化協会		
	■『おもしろふしぎ日本の伝統食材 7さば』おくむらあやお/作 中川学/絵 萩原一/写真 農山漁村文化協会		

登録番号	Q11	調査年月	2022年6月
質問	土倉鉱山（木之本町金居原）について		
回答	『ふるさと伊香』p.109によると、1907年（明治40年）に岐阜県の中島善十郎氏が奥土倉で鉱石を発見し、鉱山の開発に乗り出しました。1910年（明治43年）には田中鉱業株式会社が鉱山を買収し採掘に着手。その後、昭和9年に日室鉱業開発株式会社が買収しました。『改訂ふるさと伊香』p.130によると、最盛期は昭和33年頃で、月に98 t もの銅が産出していました。 『金居原 PHOTO BOOK』p.29によると、「鉱山従事者とその家族はもっとも多いときで1000人にもなったといいます。出口土倉付近には、ブロック住宅と呼ばれた住居、分校、保育所、マーケット、共同風呂、理髪店に映画館、うどん屋などもでき、鉱山町として発展していった」と記載があります。 『湖国と文化 56号』p.16-21にも、当時の人々の生活や催物、雪害などについて、白黒写真とともに詳細に紹介されています。 『みーな びわ湖からvol.123』p.44によると、「昭和38年の銅鉱石の貿易自由化をきっかけに、銅価格の低迷と採算性の悪化をもたらし、さらに西部鉱床の低品質、ほかの鉱脈の老化などによって同40年（1965）8月には閉山を余儀なくされた」と記載があります。 『湖北の今昔』p.55には昭和初期と昭和33年の鉱山と閉山後の鉱山跡が白黒写真で紹介されています。『ぐるっと探検産業遺産』p.98-101にも遺構のカラー写真が掲載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『ふるさと伊香』ふるさと伊香編集委員会/編		
	■『改訂ふるさと伊香』滋賀県伊香郡教育委員会/編		
	■『金居原PHOTO BOOK』長浜ローカルフォト/制作・発行		
	■『湖国と文化』56号 滋賀県文化体育振興事業団		
	■『みーな びわ湖からvol.123』長浜みーな協会		
	■『湖北の今昔』吉田一郎/監修 郷土出版社		
	■『ぐるっと探検産業遺産』前畑温子/著 神戸新聞総合出版センター		

登録番号	Q12	調査年月	2019年9月
質問	賤ヶ岳戦跡碑について		
回答	『近江歴史散歩』p.145によると、「賤ヶ岳頂上の戦跡の碑は明治十一年の建立で、県令籠手田安定撰の漢文が刻まれている。合戦の由来を述べ、飯浦、大音、川並の村民の手で建てたものであると明記してある」と記載があります。 『余呉の庄と賤ヶ岳の合戦』p.229-232には碑文の原文と意訳が全文掲載されています。 『史料県令籠手田安定1』p.192には原文のみが全文掲載されています。 『賤ヶ岳合戦史跡めぐり』p.2-3には碑文の一部ですが、原文と現代語訳が紹介されています。 『滋賀県の歴史散歩 下 新版』p.144によると、碑文は賤ヶ岳山頂広場の一角に立っており、碑の白黒写真が掲載されています。 『余呉の庄と賤ヶ岳の合戦』p.229にも白黒写真が掲載されています。 『賤ヶ岳 歴史に刻まれた合戦の地』にはカラー写真が掲載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『近江歴史散歩』徳永真一郎/著 創元社		
	■『余呉の庄と賤ヶ岳の合戦』余呉町教育委員会		
	■『史料県令籠手田安定1』鉅鹿敏子/編・発行		
	■『滋賀県の歴史散歩 下 新版』滋賀県高等学校歴史散歩研究会/編 山川出版		
	■『賤ヶ岳合戦史跡めぐり』		
	■『賤ヶ岳 歴史に刻まれた合戦の地』長浜観光協会		

登録番号	Q13	調査年月	2017年11月
質問	深坂峠（塩津街道）の紫式部の歌碑について		
回答	『人物で読む源氏物語 第十巻 朧月夜・源典侍』p.269によれば、「…塩津山は琵琶湖北岸より、現在の西浅井沓掛から福井県敦賀市疋田を結ぶ深坂古道と呼ばれる古道のある山のこと。古道に入って一時間ほどのところに紫式部の歌碑がある」とあり、紫式部歌碑の写真が掲載されています。しかしながら内容については記されていません。 『源氏物語の近江を歩く』p.53-p.55には「国道8号沿いの紫式部公園にたつ式部の歌碑。常夜灯に隣接する」と写真と共に掲載されています。歌については深坂峠の案内板と同じものが記載されています。 歌とその意味については、『みーな びわ湖からvol.142』p.30-p.33に、「紫式部も通った道 長徳2年（996）、紫式部は父の藤原為時が越前の国司として任に就く際に、ともに深坂峠を超えた。彼女は生年不詳だが、20歳前後の頃だという。輿を担ぐ人夫が、深坂超えの道をたいへん険しい道だと言っているのを聞いて、次の歌を詠んだ。 知るぬらむ 往き来にならず 塩津山 世に経る道は からきものぞと あなたたちが通いなれたこの道もつらいけど、世の中の道はもっと厳しいものですよ。そういう意味のようだが、やはり育ちの良い女性の歌だ」と書かれています。 また、『近江漫遊 歴史街道を遊ぶ』p.19、『紫式部と歩く近江・越前歌の旅』p.51、『紫式部日記 紫式部集』p.123にも歌やその意味についての記載があります。 長浜市ホームページ（2019年2月19日公開）「長浜の自然と歴史に親しむハイキングコース」のページに、深坂古道コースマップがあり、そこに紫式部歌碑の場所と歌の内容が記載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『人物で読む源氏物語 第十巻 朧月夜・源典侍』上原作和/編 勉誠出版		
	■『源氏物語の近江を歩く』畑裕子/著 サンライズ出版		
	■『みーな びわ湖からvol.142』長浜みーな編集室		
	■『近江漫遊 歴史街道を遊ぶ』菊池光治/著 サンライズ出版		
	■『紫式部と歩く近江・越前歌の旅』中嶋守治/著		
	■『紫式部日記 紫式部集』山本利達/校注 新潮社		
	関連サイト： https://www.city.nagahama.lg.jp/0000005439.html （閲覧日2023/7/16）		

登録番号	Q14	調査年月	2011年5月
質問	野瀬藤五郎の伝説について		
回答	『滋賀県湖北昔話集』には昭和58年に聞き取り調査を実施した内容がまとめられており、p.151に「とうごろうの石こづめ」が紹介されています。 『東浅井郡志 第三巻』p.113に「野瀬藤五郎に関する伝説」が記載されています。 『近江東浅井郡の昔話』p.40には「野瀬藤五郎の石子詰」という話が記載されています。この伝説は元禄12年小室藩の時代の事件で、小室藩主が百姓の藤五郎を処刑した話です。「…事件の真相はどのようなであったのか。どうやら、闇から闇へ葬り去られたらしく、記録も少い。無論、民間の伝承としてあまねく湖北地方で言い伝えられているので、一応誰でも知っている話である。しかしよく調べてみると、疑問や不明の点が少くない」とあります。 野瀬藤五郎および野瀬一族については『野瀬藤五郎墓所考』、『野瀬藤五郎系譜資料集成』が詳細に記述しており、『野瀬藤五郎墓所考』p.1には「野瀬藤五郎」という名は当主に受け継がれているらしく、刑死した当主は第十代野瀬藤五郎第七世だと記されています。p.29の系譜には元禄14年刑死となっています。また『近江國浅井郡野瀬村の歴史と傳承』p.45には藤五郎井といわれる水路をつくった伝説が紹介されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『滋賀県湖北昔話集』國学院大学説話研究会/編		
	■『東浅井郡志 第三巻』日本資料刊行会		
	■『近江東浅井郡の昔話』馬場秋星/著 イメージアシバタ		
	■『野瀬藤五郎墓所考』中西義治/編著 江北文書研究会		
	■『野瀬藤五郎系譜資料集成』中西義治/編著 江北文書研究会		
	■『近江國浅井郡野瀬村の歴史と傳承』小林善次郎/編		

登録番号	Q15	調査年月	2018年11月
質問	湖北地域（特に木之本町古橋周辺）の茶製造について		
回答	『滋賀縣史 第4巻』（昭和3年発行）p.204には明治20年県内に坂田郡外三郡茶業組合（坂田・東浅井・伊香・犬上）などの4つの組合を設立したとあります。 『きのもと七選』p.88によると「古橋のお茶は、千年以上の昔、鶏足寺を再興した僧最澄が統治に植えたのが始まりと言われ…」とあります。 『滋賀県市町村沿革史 第4巻』p.619-p.620にも「茶は千有余年の伝統を有するといわれながら…」とあり、昭和26年（1951）ごろに高時村【補足：古橋は同書p.594によると、古橋村から明治22年（1889）に5か村合併により高時村になり、さらに昭和29年（1954）には更なる合併によって木之本町と名称を変更している】で品種改良、昭和27年（1952）製茶工場の設立がされたとあります。 古橋に限らず、『滋賀県物産誌 巻11；伊香郡』には郡内でも広く茶園を有していたという記録があり、『滋賀県の茶業』（p.7「茶産地分布図」）によると昭和63年頃の木之本付近には茶園があることがうかがえます。（※詳細な地名はなおおよそその位置程度がわかります） 『近江伊香郡志 中巻』p.404-p.405にも茶についての項目がありますが、こちらもしっかりとした茶業の始まりは不明です。 また滋賀県立図書館所蔵、大正7年発行の『滋賀縣之茶業』p.1-p.2によると、大正7年時点で滋賀県内では、ほとんどの場所で副業として茶の製造を行っていたようです。なお同書の「第二章沿革 其一 史績」p.14-p.15に「伊香郡木之本附近ノ古橋茶…更に精査スル處アルベシ」と古橋茶として確認されていますが詳細は不明です。 参考資料：市内図書館で所蔵しています ■『滋賀縣史 第4巻』滋賀県庁/編 弘文堂書店 ■『きのもと七選』きのもと倶楽部/編 滋賀県伊香郡木之本町企画課 ■『滋賀県市町村沿革史 第4巻』滋賀県市町村沿革史編さん委員会 ■『滋賀県物産誌 巻11；伊香郡』（上）・（下） ■『滋賀の茶業』関西茶業振興大会実行委員会 ■『近江伊香郡志 中巻』富田八右衛門/編纂 江北図書館 * 滋賀県立図書館所蔵：『滋賀縣之茶業』滋賀県内務部		

登録番号	Q16	調査年月	2010年7月
質問	藤岡和泉について		
回答	『近江國坂田郡志第3巻下』p.515には、初代藤岡和泉甚兵衛について「長浜市伊部町の人なり、其の先は三田村より出づ。和泉元和三年八月一日を以て生る」、「彫刻を井関氏に学び…某年浅井郡山田村和泉神社社殿に妙技を奮ひ…依て和泉甚兵衛の称を得」との記載があります。また、『長浜市史 第3巻』p.319-p.321、『みーな びわ湖からvol.127』p.44にも記載があります。主に神社仏閣建築に携わる宮大工でしたが、『改訂近江國坂田郡志第3巻下』p.515に「既にして佛壇の製造を創め…浜壇の名遠近に高し」とあるように仏壇製作も行っていたようです。藤岡和泉が作った仏壇を「和泉壇」と呼びます。「和泉壇」については、『長浜市史 第3巻』p.321-p.322『近江を築いた人びと下』p.225-p.226に記載があります。 『山車（YAMA）・屋台（ヤマ）・曳山（やま）』p.97に「長浜の曳山建造者は…長刀山を含む十三基の曳山の内、実に九基について本体か亭部分が、藤岡家によるところが知られている」とあるように長浜曳山祭の曳山を藤岡一門が建造したこともわかっています。 初代藤岡和泉甚兵衛以降の藤岡一門については、『研究紀要 第5号「近江大工・藤岡和泉の名乗りについて」』p.2-p.3の「歴代の藤岡和泉についてのこれまでの研究」、p.9「江戸時代の藤岡和泉の歴代当主とその建造物」で初代から八代目光隆までについて記述があります。 『藤岡和泉一企画展 ユネスコ無形文化遺産・長浜曳山祭を造った大工のすべて』p.5に藤岡一門が手がけた作品を知る事ができる資料「藤岡家大工資料」について記述があり、同書内でその一部がカラー写真で紹介されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『近江國坂田郡志第3巻下』滋賀県坂田郡教育会/編 西濃印刷(株)出版部		
	■『長浜市史 第3巻』長浜市史編さん委員会/編		
	■『みーな びわ湖からVol.127』長浜みーな協会		
	■『山車（YAMA）・屋台（ヤマ）・曳山（やま）』市立長浜城歴史博物館/編 市立長浜城歴史博物館		
	■『研究紀要 第5号「近江大工・藤岡和泉の名乗りについて」』滋賀県安土城郭調査研究所		
	■『藤岡和泉一企画展 ユネスコ無形文化遺産・長浜曳山祭を造った大工のすべて』長浜市長浜城歴史博物館/編 長浜市長浜城歴史博物館		

登録番号	Q17	調査年月	2024年2月
質問	塩津街道・海道のルートについて		
回答	『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』p.1043、『図説 近江の街道』p.129～には「塩津街道」と記載されていますが、『塩津浜かいわい』p31、『みーな びわ湖から vol.142』p.2では「塩津海道」と記載されています。なお、『中近世古道調査報告9 若狭街道・塩津海道』においては「塩津街道」「塩津海道」共に使われています。 『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』p.1043によると、「琵琶湖北岸の塩津湊と越前国敦賀を結ぶ。海津と敦賀を結ぶ七里半越に対して五里半越とも称し、畿内と北陸を結ぶ最短路として重要な交通路であった」とあります。『図説 近江の街道』p.130に全体の道路地図があります。『塩津浜かいわい』p.49-p.58では全体を実際に歩いて検証されています。『みーな びわ湖からvol.142』p.18によると、「塩津海道は日本海側の敦賀から近江へ、海の幸などを運ぶ重要な道だった。中世までは深坂峠を越えて越前・近江の境の山地を抜けたが、急坂であったため、天正年間に越前の足田から新道野(ツドリ)、沓掛(ツカ)を經由して塩津に至る道が開かれた。そのため塩津海道は迂回、新道野越ともいわれている」とあります。また、地図の一部が掲載されています。『中近世古道調査報告9 若狭街道・塩津海道』p.86-p.89にも地図が掲載されています。 参考資料：市内図書館で所蔵しています ■『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』平凡社 ■『図説近江の街道』江竜喜之ほか/執筆 郷土出版社 ■『塩津浜かいわい』塩津浜歴史研究会／編 ■『みーな びわ湖からvol.142』長浜みーな協会 ■『中近世古道調査報告9 若狭街道・塩津海道』滋賀県教育委員会		

登録番号	Q18	調査年月	2021年9月
質問	長浜の引札について		
回答	『長浜の引札』 p.2によると、引札とは江戸時代から明治・大正にかけて盛んに利用された広告用の刷り物のことで、現代の広告チラシにあたります。 p.6には、「引札の起こりは、商業活動が活発化した江戸時代中期といわれ、【報条（ホヅヨリ）】【札まわし】【口上書】などとも呼ばれていました。最初は墨刷り一色でしたが、後に二色刷りとなり、文化・文政（1804～1829）の最盛期には錦絵風の多色刷りになり、明治へと引き継がれていきます。…明治から大正にかけては、図柄を中心とした【正月用引札】が全国的に流行します。正月用引札とは、その名の通り、新年を迎えるにあたり、各商店が得意先への挨拶まわりに配ったもので、錦絵（多色刷り浮世絵版画）の技法を取り入れた鮮やかな色づかいと斬新な図柄が特徴です」とあります。 p.10には長浜では、明治15年（1882）に開通した鉄道や琵琶湖の連絡船などによる交通網の発展に伴い商業活動も活発になり、数多くの商店が軒を連ねるようになったと記述があります。 『長浜の企業人列伝』 p.14-p.15では「引札にみる長浜のにぎわい」という項目で鉄道に関連する引札が紹介されています。 現存する引札の中には現在まで続いている老舗店の名前も見られます。『みーな びわ湖からVol.153』 p.10-p.11には「引札に見る長浜の老舗」として「小山 仁平引札」「親玉店引札」などの引札が紹介されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■ 『長浜の引札』 長浜市長浜城歴史博物館		
	■ 『長浜の企業人列伝』 長浜市長浜城歴史博物館/編 長浜市市民協働部歴史遺産課		
	■ 『みーな びわ湖からVol.153』 長浜みーな協会		

登録番号	Q19	調査年月	2021年7月
質問	大吉寺（旧浅井町野瀬）の歴史について		
回答	『滋賀県百科事典』p.457「大吉寺」の項目には大まかな歴史が簡潔に述べられています。 大吉寺の沿革については、『寺院縁起の成立と在地の情勢 江州浅井郡大吉寺の放生会と「大吉寺縁起」』の「二、大吉寺沿革～放生会を中心に～」に詳しく記載があります。 『東浅井郡志 第4巻』p.566の「大吉寺縁起」によると、大吉寺の本尊観世音菩薩について、さらには建立起源などがわかります。p.567「大吉寺勧進帳」によると、大吉寺の名前の由来、延暦元年(782)の洪水で天吉寺の額の「天」の「一」が洗い流されたことがわかります。『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』p.971「大吉寺跡」にも同じ内容の記載があります。 『滋賀県史蹟調査報告書 第6冊』p.65-113に「大吉寺」の本坊各堂趾について詳しく述べられています。 『寂寥山（シヤリョウザン）大吉寺』は、平成14年（2002）10～11月の浅井町歴史民俗資料館企画展の内容を再構成し、編集した資料であり、やさしくまとめられた歴史のほか、史跡・美術工芸品、古文書などがカラー写真で紹介されています。 『史蹟大吉寺』には、室町幕府の祈願寺となった経緯のほか、南北朝から戦国時代の大吉寺の創建と盛衰が語られ、遺跡、自然については信徒の目で述べられています。大吉寺史蹟保存会により編集されたものであり、生活の一部としての大吉寺をとらえた資料です。 参考資料：市内図書館で所蔵しています ■『滋賀県百科事典』滋賀県百科事典刊行会/編 大和書房 ■『寺院縁起の成立と在地の情勢 江州浅井郡大吉寺の放生会と「大吉寺縁起」』橋本章/著 佛教大学鷹陵史学会 ■『東浅井郡志 巻4巻』日本資料刊行会 ■『日本歴史地名大系25 滋賀県の地名』平凡社 ■『滋賀県史蹟調査報告 第6冊』滋賀県/編 名著出版 ■『寂寥山大吉寺』浅井町歴史民俗資料館 ■『史蹟大吉寺』伏木貞三/編 大吉寺史蹟保存会		

登録番号	Q20	調査年月	2017年3月
質問	国友鉄砲と曳山の関わりについて		
回答	『国友鉄砲の歴史』 p.148の「国友に開いた文化の華」によると、「国友の鉄砲鍛冶たちが、財政難のため、鉄砲製作以外にも収入の道を求めなければならなくなったことが、国友に文化の華を開かせることになった。…江戸時代後期、物資の集散地として栄えた長浜は、富裕な商人たちが軒を連ねていた。そして、彼ら、長浜の町衆たちの祭りに繰り出される曳山は、各町が豪華さを競った。国友の鉄砲鍛冶たちは、その金工技術を買われ、曳山の銑（かざり）金具の製作に腕を奮った」とあります。 『みーな びわ湖からVol.139』 p.26-p.27には、「飾金具には鍍金（ダウ）や彫金、着色といった技術がふんだんに使われており、なかでも金属に色を付けることに関しては、鍍金（トキ）や七宝の技法が多くみられる。特に寿山、常盤山、翁山の七宝金具は出色といわれている」、「飾金具の作品の中で特筆すべきことが、その職人の中に国友鉄砲の金工職人である国友源太夫・藍水堂一徳の名前があるという点だ。その作品は寿山に残る」とあり、国友鉄砲と曳山の関わりについて記載されています。 寿山の金具の写真と詳細は『特別展 国友鉄砲鍛冶』 p.67-p.68で見ることができます。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『国友鉄砲の歴史』湯次行孝／著 サンライズ出版		
	■『みーな びわ湖からVol.139』長浜みーな協会		
	■『特別展 国友鉄砲鍛冶』市立長浜城歴史博物館／編		

登録番号	Q21	調査年月	2021年10月
質問	昭和56年（1981）の余呉地方の豪雪について		
回答	『余呉町誌 通史編上巻』 p.31-余呉町の気象災害として昭和56年の豪雪があげられており、 p.36には昭和55年12月29日から昭和56年1月23日までのあいだに柳ヶ瀬の積雪は350センチになり、死者1名、負傷者12名、住家全壊7戸、半壊10戸、一部損壊357戸などと報告されています。 『余呉町誌 通史編下巻』 p.558～には昭和56年の豪雪として、1月23日中河内で積雪655センチとあります。 『滋賀県災害誌 第3部』 p.72-には気象概要、県内の観測所における積雪量、警報・注意報処置、県内の被害状況、り災者、被害金額等が記されています。 『白魔との闘い 56豪雪の記録』の序文、「はじめに」によると、昭和56年の豪雪は未曾有の豪雪で、100日におよぶ白魔との闘いであり、自然との闘いに耐え抜いた住民の苦労、雪解け後表面に出て来た被害、その他観測史上異例の豪雪の貴重な資料と記録を残すこととしたと記載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『余呉町誌 通史編 上下巻』余呉町誌編さん委員会/編 余呉町役場		
	■『滋賀県災害誌 第3部』滋賀県		
	■『白魔との闘い 56豪雪の記録』余呉町/編 建設省高時川ダム調査事務所		

登録番号	Q22	調査年月	2021年4月
質問	長浜市の劇場について		
	『近江長濱町志 第3巻本編下』p.407に明治16年6月25日横町に長栄座が創設されたとあり、大正9年には南呉服町に日比劇場が建設中と記載があります。 『長浜市史 第7巻』p.126には、「演劇も明治期にはさかんとなり、明治16年（1883）6月には常設の劇場である長栄座（のち松竹館、さらに長浜協映と改称）が横町（元浜町）に開設され、ついで泉座（北呉服町）が開設され、大正10年（1921）4月には常設映画館の日比劇場（のち大和劇場、南呉服町）、同年8月には寄席の新清館（高田町）がいずれも興行をはじめた。その後も紺屋町（朝日町）に帝国館（のち長浜大映・長浜映劇）、西本町（元浜町）にロード劇場（長浜東映）などができた」と記載されています。 『長浜市史 第4巻』p.123によると、上記の長栄座では歌舞伎、玉乗り、落語、角力などの興行があり、泉座では素人浄瑠璃大温習会が開催されたそうです。 『私たちの調べた郷土長濱』p.130-p.132には刊行時（昭和25年）の松竹館、文化会館、昭和劇場、長浜映画劇場、大和劇場について記述があります。 『湖北の今昔』p.14には昭和20年代の松竹館の写真が掲載されています。また『目で見える湖北の100年』p.89に「映画館前」（館名不明）として昭和初期の写真が掲載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『近江長濱町志 第3巻本編下』泰山堂		
	■『長浜市史 第4巻』長浜市編さん委員会/編		
	■『長浜市史 第7巻』長浜市編さん委員会/編		
	■『私たちの調べた郷土長濱』長濱市立第四中学校教育調査部/編		
	■『湖北の今昔』郷土出版社		
	■『目で見える湖北の100年』郷土出版社		

登録番号	Q23	調査年月	2020年5月
質問	長浜の遊郭について		
回答	『長浜市史 第4巻』p.123によれば「江戸時代からの遊び場所で料理屋や芝居小屋があった妙法寺門前は、明治に入ってからその境内は南片町となった」との記載があり、「遊廓は幕末には妙法寺の南に接する鉄砲町（通称）に五、六軒の遊廓が建てられたことに始まったが、明治五年九月県の命によって営業廃止となり、同年十一月十一日の長浜大火によって焼失してしまった。しかし妙法寺の再建にともない、関係者の出願によって、その境内に遊廓も移転再建されることになった」とあります。 『近江長濱町史 第3巻本編下』p.515には「風俗史第十一章 遊廓」とあり、楼名と芸娼数一覧が記載されています。 『写真集 長浜百年』p.124とp.125に長浜の遊郭の写真が掲載されており、「明治初年、県下第一号の公認を得て、【辰巳藤】が南片町で貸座敷営業をはじめました。以後、鉄砲町（八幡町）にあった郭は続々と南片町へ移転、十五軒が営業許可をとって、置屋・貸席・茶屋を、昭和三十四年の法律による禁止時まで営んでいました」と記されています。 『近代庶民生活誌14 色街・遊郭Ⅱ』p.117によれば「長浜町遊廓は滋賀県坂田郡長浜町字南片町に在って…現在貸座敷は十五軒あって娼妓は五十五人居る」とあり、娼妓名など詳しく記されています。（この資料は滋賀県立図書館が所蔵しています） 『日本遊里史 日本文化史叢書』p.568には「長濱町大字南片 妙法寺貸屋敷数十五 娼妓数四十九」との記載があります。（この資料は東近江市立八日市図書館が所蔵しています）		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『長浜市史 第4巻』長浜市史編さん委員会/編 長浜市役所		
	■『近江長濱町志 第3巻本編下』中川泉三/編 臨川書店		
	■『写真集 長浜百年』長浜市総務部企画課/編 長浜市役所		
	＊『近代庶民生活誌14 色街・遊郭Ⅱ』南博/編 三一書房（滋賀県立図書館所蔵）		
	＊『日本遊里史 日本文化史叢書』上村行彰/著 藤森書店（東近江市立八日市図書館所蔵）		

登録番号	Q24	調査年月	2022年6月
質問	ハンプクジ 飯福寺（長浜市木之本町）について		
回答	『湖北観音巡礼 観音の里』p.58に、「飯福寺は、『興福寺官務牒疏』では、己高山観音寺の別院として記載されていますが、『大日本国伊香郡己高山縁起書』では、己高山惣山七箇寺の一つに数えられております」とあり、また「室町時代の延徳二年（1490）に、法印実盛によって当寺は再興され、近江守護職の京極氏が帰依してその庇護のもと栄えました」と記載があります。 『近江・若狭・越前寺院神社大事典』p.365-p.366「飯福寺」の項に、「元禄九年（1696）の古橋村寺社差出帳（古橋区有文書）では、本堂・薬師堂・権現社のほか、宝珠院・金剛院など五塔頭を有している。のち、堂宇(ﾄﾞﾜ)焼亡、このとき村民が薬師堂本尊を土中に埋めて焼失を免れたという。その後一宇の坊舎を建立、明治元年（1868）薬師堂本尊を飯福寺本尊とした。昭和初年廃寺となった」とあります。 『ふるさと伊香』p.259に、「己高閣には、古橋にあった戸岩寺(ﾄｲﾂ)と法華寺(ﾎｯｸｼﾞ)と飯福寺の仏像を合併し、鶏足寺の仏像として収蔵されています」と飯福時の仏像の所在について載っています。 鶏足寺との関係については、『湖北観音巡礼 観音の里』p.56に、鶏足寺は「明治四年(1871)に、政府から境内の一部上地(ｱｸﾞ ｼ)を命じられてからは、寺院の維持が困難になり、堂宇の損傷もはげしくなって、ついにはご本尊の十一面観音菩薩像を古橋の里におろし、それからは飯福時が鶏足寺の管理を兼ねるようになりました」とあります。また『みーな びわ湖からVol.100』p.48の「旧鶏足寺」の項に「かつて山岳宗教の聖地だった己高山の山頂近くにあった鶏足寺がなくなった後、飯福寺が鶏足寺と呼ばれるようになった」と紹介されています。また『みーな びわ湖からVol.110』p.24-p.25にも同様の記載があります。 参考資料：市内図書館で所蔵しています。 ■『湖北観音巡礼 観音の里』 梶村睦親/著 睦画会 ■『近江・若狭・越前寺院神社大事典』 平凡社地方資料センター/編 平凡社 ■『ふるさと伊香』 滋賀県伊香郡社会科教育研究会/編 滋賀県伊香郡教育委員会 ■『みーな びわ湖からVol.100』 長浜みーな協会 ■『みーな びわ湖からVol.110』 長浜みーな協会		

登録番号	Q25	調査年月	2021年5月
質問	古保利古墳群について		
回答	『みーな びわ湖からVol.100』 p.51によると、「びわ湖に面した細長い丘陵上に形成され、総数132基以上の古墳が南北約3kmにわたって列状に並ぶ。3世紀中葉～7世紀中葉にかけて累代的に築造されたと推定され、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳といった四つの基本的なかたちの古墳がすべてそろっている」と記載されています。 『高月町史 分冊2 景観・文化財編』 p.11-p.15には、「現存する各古墳は総体的に残存状況が極めて良く、前方後円墳八基、前方後方墳八基、円墳七九基、方墳三七基で前方後円（方）墳一六基を含む古墳群は滋賀県内で唯一であり、国内でもその集中度の高い古墳群の一つと推定されるとある。主な古墳として、深谷古墳、小松古墳、木戸古墳、木戸越古墳、野瀬古墳、西野山古墳などがあげられ西野山古墳は古保利古墳群中最大の古墳である」と記載されています。 『長浜市の遺跡1』では、小松古墳と西野山古墳について詳しく紹介されており、小松古墳は全長60m、前方部は長さ23m、後方部は長さ37m、西野山古墳は全長90m、前方部は長さ34m、後円部の直径は59mとあります。またそれぞれの推定復元図も記載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『みーな びわ湖からVol.100』 長浜みーな協会		
	■『高月町史 分冊2 景観・文化財編』 高月町/編		
	■『長浜市の遺跡1』 長浜市教育委員会		

登録番号	Q26	調査年月	2019年5月
質問	ゲンバ オ ジョウ 玄蕃尾城について		
回答	『大きな縄張図で歩く！楽しむ！完全詳細山城ガイド』p.48によると、1582年（天正10年）に近江と越前（現在の滋賀県と福井県）の国境に柴田勝家により築かれ、その後1583年（天正11年）の賤ヶ岳の戦いでは柴田勝家の本陣となるも勝家が敗れたため、廃城となったとされています。 『近江の遺跡 国・県指定の史跡、考古資料』p.97に「玄蕃尾城という名称は、柴田勝家の家臣であった佐々玄蕃（盛政）の名に由来する」と記載があります。 『図解近畿の城郭Ⅳ』p.16には別称として「内中尾城」とあり、「…城跡の南方には刀根坂（倉坂峠・久々坂峠）が位置し、この峠を押さえるために築かれた城であることがわかる。刀根坂は、近江柳ヶ瀬と越前刀根を結ぶ重要な街道で、明治十一年（1878）の明治天皇の北陸行幸にも利用されている。…刀根から敦賀に出ると海路も利用でき、柳ヶ瀬に残る明治の道標には、【敦賀汽船】と刻まれている。一方、城跡の東山麓には柵の木峠開削後の北国街道が縦貫しており、これに睨みを効かせている…」とあり、戦国期から明治期にわたり交通の要所であったことがうかがえます。 『滋賀県文化財目録 平成24年度版』p.187を見ると、昭和59年（1984）3月10日に県指定史跡に登録され、平成11年（1999）7月13日に新たに国指定史跡に登録されたことが確認できます。 城の構造は、『滋賀県文化財学習シート 史跡名勝天然記念物編』No.35「玄蕃尾城跡」に「南北約300m、東西が約150mの範囲で、尾根上に築かれています。基本的に六つの郭を連ねた構造で、各郭は、高さ1m前後の土塁で囲まれ、さらに外側は幅5～7mの空堀で区切られて、土橋で連結されています。本丸は、40m×50mのほぼ方形の郭で、この北東隅には10m四方で高さ1mの高まりがあり、礎石が今も残っていることから、ここに櫓が建っていたと考えられます。主郭の北、東、西には細長い平坦部が巡り（武者走り）、賤ヶ岳方面を監視するための郭に繋がります」とあります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『大きな縄張図で歩く！楽しむ！完全詳細山城ガイド』 加藤理文/監修 学研プラス		
	■『近江の遺跡 国・県指定の史跡、考古資料』滋賀県文化財保護協会		
	■『図解近畿の城郭Ⅳ』中井均/監修 城郭談話会/編 戎光祥出版		
	■『滋賀県文化財目録 平成24年度版』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課		
	■『滋賀県文化財学習シート 史跡名勝天然記念物編』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課		

登録番号	Q27	調査年月	2021年12月
質問	琵琶湖産の真珠について		
回答	『滋賀の20世紀』p.140-p.141に「貝は、自然状態でも真珠をつくるが、明治のなかば、伊勢湾（三重県）でアコヤガイを使って、はじめて真珠養殖に成功した。滋賀県では、大正末に徳島県出身の藤田昌世が、県水産組合長・吉田虎之介の援助をうけて、栗太郡常磐村（草津市）で淡水真珠養殖の実験を開始し、昭和のはじめに、イケチョウガイを用いて成功。昭和10年（1935）頃から、有核真珠の本格的な養殖がはじまった。第2次世界大戦後は宇田清一郎が無核での養殖に成功し…」とあり、養殖場が次々つくられ、「びわ湖真珠」として海外にも輸出されたとあります。しかし昭和40年（1965）頃、母貝不足のためイケチョウガイの人工生産に取り組みられるようになり、昭和60年代には、母貝の生残率や成長が低下し、真珠の生産量も大きく落ち込んでいったようです。 『歴史 第23号』p.27-p.28に「琵琶湖の淡水真珠は【近江の海 しづく白玉知らずして恋せしよりは今ぞ溢れる】と万葉集に詠まれているように“近江国の白玉”として古くから採集されていたと思われる」とあり、「淡水真珠は青白い海産の有核真珠と違って淡いピンク色で真珠層が厚いため光沢は底深く天然真珠と全く同じである」とあります。 『湖国と文化 1985年33号』p.93-p.94にも、イケチョウガイを使った淡水真珠と、アコヤガイを使った海産真珠の養殖方法やできあがりの違いが記されています。 イケチョウガイの繁殖水域や生態については、『日本産淡水貝類図鑑 1 改訂版』p.84-p.86に記載があります。 『しんじゅのこ』巻末付録「びわ湖真珠ができるまで」には、母貝の改良や環境の改善についてや、収穫までの工程が写真付きで紹介されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『滋賀の20世紀』滋賀の20世紀編集委員会/編 サンライズ出版		
	■『歴史 第23号』滋賀県立長浜北高等学校歴史部/編		
	■『湖国と文化 1985年 33号』びわ湖芸術文化財団/編		
	■『日本産淡水貝類図鑑1 改訂版』ピーシーズ		
	■『しんじゅのこ』渡邊良重/え 福永信/ことば リトルモア		

登録番号	Q28	調査年月	2025年6月
質問	富田人形について		
回答	『滋賀県選択無形民俗資料 富田人形』序には「湖北のびわ町大字北富田に伝えられた【文楽人形】の一種」で、またp.28に「昭和三十二年（1957）八月、滋賀県無形民俗資料に選定せられる」とあります。 『富田人形ワークシート 学習用ワークシート富田人形』p.1には「三味線の伴奏や語りに合わせて、人形をあやつる芝居です。…長浜市で百年以上もの歴史をもつ人形浄瑠璃で、滋賀県の選択無形民俗文化財です」とあります。 富田人形の始まりは『富田人形こぼれ話』p.12-p.13に「天保のころ全国各地を巡業していた阿波人形一座が、滋賀県東浅井郡竹生村で大雪に遭い、興行不能となって路銀の抵当として、長持ち四本に入れた約六十個の人形を残したという言い伝えがあるといわれ、これらの人形は現在でも同村に残り、村人たちはこれを使って共遊団という人形芝居一座を結成、人形芝居を楽しんでいる」とあります。 『富田人形』p.26には、人形は、首、手、胴、足からできており、「使用されている首は、男役あり、女役あり、…誠に種々雑多である。そしてその一つ一つに固有の名称がつけられている」とあります。 『滋賀県選択無形民俗文化財 富田人形』p.7には「富田人形のカシラー覧 法量・機巧・胴串」調査結果の一覧表、p.8-p.19に首の写真と解説があり、p.20-p.23には手や足、装束の写真と図もあります。 『富田人形ワークシート/滋賀県選択無形民俗文化財 人形浄瑠璃 富田人形』p.4には「富田人形主要演目紹介」として「似合夫婦出世緋(にあいのめおとしゅっせのひきつな)豊住家の段」のほか、7演目が写真と共に紹介されています。また、p.1には平成3年に建設された本格的な人形浄瑠璃の舞台を持つ会館として「富田人形会館」、富田人形の保存と継承、文化交流、後継者育成に努め滋賀県文化奨励賞・ブルーレイク賞・滋賀県文化功労者など数々の栄誉に輝く、「富田人形共遊団」について記載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『滋賀県選択無形民俗資料 富田人形』富田人形共遊団(初版) びわ町教育委員会(再版)/編		
	■『富田人形ワークシート 学習用ワークシート富田人形』長浜市歴史文化啓発推進協議会/編		
	■『富田人形こぼれ話』早崎観縁/著 朝日カルチャーセンター		
	■『富田人形』竹生村教育委員会		
	■『滋賀県選択無形民俗文化財 富田人形』びわ町教育委員会社会教育課		
	■『富田人形ワークシート/滋賀県選択無形民俗文化財 人形浄瑠璃 富田人形』長浜市歴史文化啓発推進協議会/編		

登録番号	Q29	調査年月	2018年5月
質問	長浜バイパス（国道8号線）について		
回答	『東浅井 わたしたちのふるさと』p.173には「明治9年（1876）に、国道・県道・里道の制度ができ、名古屋―敦賀間の名敦道路が国道になりました。そして、昭和28年（1953）に国道8号線（新潟―京都間）と改名になりました」とあります。 『ふるさと長浜』p.99には、「明治以後、新しい道路が次々と開通したが、その内最も主要なものは馬車道（県道高山・長浜線）である。…大正年間までその長浜～東上坂間に乗合馬車が走っていたので、馬車道の名が出たのである。…次に現在の国道8号線の建設である。これは昭和11年～12年に敦賀～名古屋間につくられた名敦道路の一部にあたる。…現在では、この道路は北陸と中部・近畿を結ぶ非常に交通量の多い道路になってしまった。このため、市街地のさらに東部を迂回するバイパスが必要となったわけである」とあります。 『長浜市史 第4巻』p.389には、「…市は昭和38年（1963）1月、隣町にも呼びかけて国道8号線バイパス路線設置促進期成同盟会を結成し、建設省に対し早期実現を求める積極的な陳情運動を推進した。しかし建設省は、優先順位が低いとして冷やかかであった。そこで市は、バイパス沿いに新しく市民会館を建設し、それを核として副都心をつくるという新市街地形成事業を先行させ、長浜市民会館は昭和40年（1965）10月に完成した。…こうした努力が実り、建設省もようやく着工にふみきり、昭和45年（1970）7月1日から小堀町―勝町間の工事が開始された。しかし工事は、遅々として進まなかった。…着工から16年目の昭和61年（1986）10月21日、基本幅員27.5m（市街地区間30m）のバイパス8.2kmが完成し、暫定2車線で通行が開始された。そして翌62年10月1日、それまでの国道8号線長浜区間は県道長浜・近江線に、国道8号線バイパスが国道8号線に、それぞれ路線変更された」と記載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『東浅井 わたしたちのふるさと』東浅井郡郷土資料編集委員会/編著		
	■『ふるさと長浜』長浜市教育委員会・長浜北高等学校歴史部/編 長浜市		
	■『長浜市史 第4巻』長浜市史編さん委員会/編 長浜市役所		

登録番号	Q30	調査年月	2011年8月
質問	北国街道沿いの宿場について		
回答	『近江の地名』のp.167には、「北国街道は、鳥居本の北端で中山道と分かれ、米原、長浜、木之本、柳瀬、椿坂、中河内の宿場を経て、栃ノ木峠（虎杖峠）を越えて越前国に入る街道である」とあります。各宿場を説明したものとして以下の資料があります。 『図説・近江の街道』には、p.112-p.113に米原宿についての記載があり、「江戸時代には米原宿には常時十三匹の馬が置かれた」とあります。p.115-p.116に長浜宿についての記載があり、「宿場には、本陣や旅籠八軒(安永2年:1773)のほか、馬十四匹が置かれ…」とあります。p.118-p.120に木之本宿についての記載があり、「…旧本陣の竹内家、玄関の銅板張りの柱には馬つなぎの金具が残り…」とあります。p.123-p.124に柳ヶ瀬宿、p.125に椿坂宿、p.126に中河内宿の記載があり、p.123には「柳ヶ瀬は椿坂とともに北国街道の木之本宿と中河内宿間の間宿で、木之本から2里半、椿坂へ1里の位置にある」とあります。 『日本歴史地名大系25』p.1038には、柳瀬宿についての記載があり、「余呉川沿いに北国街道が通り、北部で越前国刀根村（現福井県敦賀市）へ通じる倉坂越（鞍坂越・刀根越とも）が分岐、交通上の要衝で宿があり…」とあります。p.1038に椿坂宿についての記載があり、「柳瀬村の北西、余呉川源流域の山村で、北国街道の宿駅」とあります。p.1039に中河内宿についての記載があり、「椿坂村の北、北国街道に沿う街村で宿が置かれた。…また宿は街道東側に本陣柳橋家、西側に脇本陣中村家・問屋山口家があったが、幾度かの大火で宿場の景観や古文書類は失われた（現在本陣地跡の碑が建つ）」とあります。 『湖国百選 街道』p.82-p.91や『北国街道と脇往還』p.107-p.137にも、北国街道についての記載があります。 『みーな びわ湖からvol.116』p.12-p.33には、北国街道絵図と共に、街道と宿場町の現在の様子についての記載があります。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『近江の地名』京都地名研究会/編著 サンライズ出版		
	■『図説・近江の街道』江竜喜之ほか/執筆 郷土出版社		
	■『日本歴史地名大系25』平凡社		
	■『湖国百選 街道』滋賀総合研究所/編 滋賀県(企画部地域振興室)		
	■『北国街道と脇往還』市立長浜城歴史博物館/企画・編集 サンライズ出版		
	■『みーな びわ湖からVol.116』長浜みーな協会		

登録番号	Q31	調査年月	2022年5月
質問	木戸港（長浜市高月町）について		
回答	『高月町史 分冊1 景観・文化財編』p.145には「戦前には古保利丘陵の西麓の字【木戸】に港が位置していたという。…その港は、現在は放棄されてしまっているのだが、琵琶湖の漁業に関する争論の伝承が地元に残されており、現地には石垣や段々畑の跡なども残されている」と記載があります。 『高月町の地名』p.421には、現小字名として「北木戸」と記されており、その小字には「北木戸」、「木戸」、「木戸坂」という地名がついています。 それぞれの地名について「北木戸」は「木戸坂の入口付近。圃場整備後の地名」、「木戸」は「琵琶湖側の木戸への坂道のある区域。木戸は出入口。湖北の人々にとって、琵琶湖の出入口であった」、「木戸坂」は「江戸時代、年貢を木戸港へ運んだ山越えの道。西野をはじめ、近隣の多くの人々が通った。休み石や倉庫跡がある」と解説があります。 『西野水道と農民』p.84には琵琶湖に通じる道として木戸の道があり、近世には彦根藩の年貢米を運ぶのに使われたと記されています。当時は木戸地先に船着場と米倉庫があり、片山（現長浜市高月町片山）の米商人に場所を提供し、丸子船で年貢米を運搬したとあります。 『我がふるさと 西野』p.90によれば、琵琶湖は古代から京都、大阪に通じる交通路であり、旧西浅井町塩津港は北陸の米が敦賀を経由して大津へとつながる要衝地だったとあります。西野の木戸港も塩津港が栄えた頃、米を船で長浜、塩津あるいは大津へと運んだとの記述があります。そうした形態が今も残っており、木戸港に通じる上り道がゆるやかになっていたり、途中で休憩できる所があったり、石垣が残されているなど裏付けがあり、一俵近くの米を背にして山道を登り、休憩をしながら往復したのではないかと記されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『高月町史 分冊1 景観・文化財編』高月町/編		
	■『高月町の地名』高月町史編纂委員会/編 高月町教育委員会		
	■『西野水道と農民』成田迪夫/著 サンライズ出版		
	■『我がふるさと 西野』成田迪夫/著 高月町		

登録番号	Q32	調査年月	2021年11月
質問	井口弾正屋敷跡について		
	『近江伊香郡志 上巻』p.507に「井口氏の屋敷跡と伝えられるゝもの北富永村大字井口にあり」とあります。『滋賀県伊香郡高月町村落景観情報』p.8には「…小谷城の支城としての役目を持ち、土塁や堀が築かれていたというが、その規模は明らかではない。ただ、上、下屋敷に分かれ、現小学校と運動場、南の畑付近と推察される」とあり、p.9に地図が載っています。『ゼンリン住宅地図滋賀県長浜市 3』p.104で現在の市立富永小学校位置が確認できます。『高月町史 分冊1 景観・文化財編』p.12-p.19には絵図や地籍図が載っており、「集落中央北寄りの小字【殿屋敷】は、井口弾正の屋敷跡と伝えられる」とあります。 『高月町の地名』p.9には地名の由来として「井口弾正屋敷跡で、上屋敷・下屋敷があったとされる。現在は富永小学校になっている」とあります。 『浅井長政と姉川合戦』p.40-p.41の浅井氏系図の中に「井口弾正」の名前があり、p.46に「…井口氏は、富永庄総政所を主宰する庄官で、高時川右岸を灌漑する伊香郡用水を統括していた【井預り】でもあった」とあります。 『高月町史 分冊2 景観・文化財編』p.35には井口屋敷遺跡の写真が載っています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『近江伊香郡志 上巻』富田八右衛門/編纂 弘文堂書店		
	■『滋賀県伊香郡高月町村落景観情報』高月町町史編纂委員会/編 高月町教育委員会		
	■『ゼンリン住宅地図滋賀県長浜市 3（2022）』ゼンリン		
	■『高月町史 分冊1 景観・文化財編』高月町/編		
	■『高月町の地名』高月町史編纂委員会/編 高月町教育委員会		
	■『浅井長政と姉川合戦』太田浩司/著 サンライズ出版		
	■『高月町史 分冊2 景観・文化財編』高月町/編		

登録番号	Q33	調査年月	2025年6月
質問	湖北地方のオコナイについて		
回答	『都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成8 近畿地方の祭り・行事1』p.35には、「オコナイの行事は、鏡餅を搗(ツ)き、夜を徹して祀り、神仏に供えることを中心に展開する。鏡餅は祖霊・穀霊の象徴であり、鏡割りで神霊や祖霊のミタマを食べることによって祖孫一体の意識を強め、人間の魂の甦新(リツ)/註(ツ)図(ツ)書(ツ)館(ツ)を図る。また餅花や造花を飾ることによって豊穰を祈願する」と記載されています。 『長浜市史 第6巻』p.176には「地域の豊作・大漁・安全を祈願して一月から三月に行われる行事」とあり、オコナイの分布に関してはp.178に「近畿地方をはじめとする西日本各地に認められるが、特に滋賀県の湖北（長浜市・坂田郡・東浅井郡・伊香郡）と甲賀郡に高い密度を示している」との記載があります。 『オコナイの源流を探る』p.31ではその起源として「修正会、修二会のなかに種々の民間信仰をとり込みながら、近江独特のオコナイを村々に定着していったと思われる」とあり、p.44には「湖北のオコナイの分布と実態」として日程や開催場所などの分布が記載されています。 湖北のオコナイの中でも、地域によってさまざまな差異があり、上記『都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成8』には、各地域で行われるオコナイの特徴が記載されています。p.97には高月町馬上のオコナイについて「鏡餅をコモに巻き背に負うオйнаワ（負い縄）にこの神事の特徴があり、カガミオイをする」や「オйнаワの輪を頭にかぶると「無病息災が成就する」「賢くなる」などといわれ、村人は競ってカガミオイにかぶせてもらう」とあります。 『近江のオコナイ』p.94には馬上のオコナイの詳細の他、負い縄に入る子どもたちの写真が掲載されています。		
	参考資料：市内図書館で所蔵しています		
	■『都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成8 近畿地方の祭り・行事1』 海路書院		
	■『長浜市史 第6巻』長浜市史編さん委員会/編 長浜市役所		
	■『オコナイの源流をさぐる 仏教悔過の世界』市立長浜城歴史博物館/編 市立長浜城歴史博物館		
	■『近江のオコナイ 特別展』市立長浜城歴史博物館/編 市立長浜城歴史博物館		